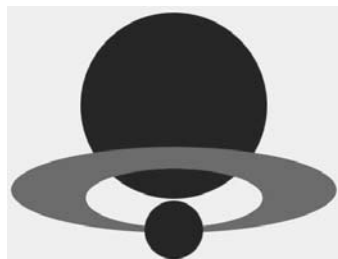

第41回原産年次大会の概要



平成20年5月20日



社団法人 日本原子力産業協会

1

1. はじめに

◆大会のねらい

「地球環境」と「エネルギー」が人類の持続的発展に不可欠な2大要素であることを提示した上で、その2つの確保に貢献できる原子力の利用を世界的に推進することが重要とのメッセージを発信すること。

◆基調テーマ

「人類の持続的発展と原子力の果たすべき役割」

◆参加者：約900名

（うち海外参加者は22カ国・地域、
3国際機関から約100名）



1. はじめに

◆大会プログラム

開催日：平成20年4月15日(火)～16日(水)
場 所：東京プリンスホテル

4月15日(火)	4月16日(水)
開 会 (9:30～10:00)	セッション3 (9:30～12:30) 世界の原子力リネッサンスは本物か
セッション1 (10:00～12:00) 持続的発展への条件を問う	
昼 休 み (12:00～13:30)	午餐会 (12:45～14:30)
セッション2 (13:30～17:30) 環境とエネルギー： 大規模原子力開発国と 台頭しつつある国の戦略とは	
レセプション (17:45～19:00)	



2. 各セッションの概要

◆開会：今井会長所信表明

- 中越沖地震は原子力発電所にとって極めて貴重な経験。広く世界に発信し共有されるべき。新たな経験や知見を迅速に取り入れ、最新技術の反映や規制の改善のために絶え間なく努力していくことが、最も重要な教訓である。
- 地球温暖化対策は世界にとって最も重要な課題の一つ。世界最高水準のレベルにある日本の省エネ技術、高効率化技術、さらに原子力製造技術を世界に広め、温暖化対策は日本がリードするとの意気込みで取り組むことが重要。原子力利用はCO₂削減に最も有効であり、日本だけでなく世界に浸透させなければならない。
- 「原子力産業安全憲章」のもと、原子力関係者には、何よりも「安全」を基盤とし、重要な使命を担うものとしての誇りと責任感をもち、真摯に取り組むことを願う。



2. 各セッションの概要

◆開会：福田総理大臣所感

- 安全の確保を大前提とした原子力の推進は、立地地域の皆様、国民一人ひとりの理解なくしては実現不可能である。
- わが国として、基幹電源の原子力発電を着実に推進していくことが極めて重要。将来的にも原子力発電の持続的な利用を可能にするためには、「もんじゅ」などの高速増殖炉の開発も、今後一層重要になる。
- 原子力発電は、地球温暖化対策の切り札。
- G8洞爺湖サミットでは、議長として、温暖化対策における原子力の重要性にも配慮しながら、各国との議論にリーダーシップを発揮したい。
- アジアや世界の安全で平和的な原子力拡大に貢献することも、わが国の重要な役割。



2. 各セッションの概要

◆セッション1「持続的发展への条件を問う」①

大会全体の基調となるセッションとして、「地球環境」と「エネルギー」の2つの持続的发展への条件をめぐる講演を行った後、これら2つの条件に合致する原子力利用の意義を確認した。

●茅 陽一 (財)地球環境産業技術研究機構 副理事長

持続的发展のためには、「エネルギーの脱炭素」が資源面でも気候変動の面でも最大の課題。長期の脱炭素には、非化石燃料による発電、鉄鋼業での改善、次世代自動車の導入、民生では電力と熱需要面での改善が鍵となる。原子力発電こそ脱炭素のエースと言える。



2. 各セッションの概要

◆セッション1 「持続的発展への条件を問う」②

- フランソワ グエン 国際エネルギー機関（IEA）上級政策顧問



世界のエネルギーは、持続可能なシステムから大きく乖離した状況。より確実に低炭素であるエネルギー利用システムへ移行させることが世界各国の直面する重要課題。エネルギー利用効率の改善とともに原子力、再生可能エネルギーの最大限の利用によりエネルギーセキュリティと持続可能な環境を達成することに貢献できる。

- ユーリー ソコロフ 国際原子力機関（IAEA）事務局次長

原子力は、重要かつ信頼性の高い、持続可能で環境に優しいエネルギー源としてのポテンシャルを有する。原子力利用は常に、持続可能なものとなるよう計画・設計がなされるべきであり、安全、環境への影響、核不拡散及び社会的受容に対する配慮が求められる。



7



The 41st JAIF Annual Conference

2. 各セッションの概要

◆セッション2 「環境とエネルギー：大規模原子力開発国と台頭しつつある国の戦略とは」①

既に大規模な原子力発電利用を進めている国と今後台頭する国々から、環境・エネルギー分野で直面する課題と解決に向けた基本政策や戦略を発信することを通し、原子力は各国の戦略の中で重要な役割を果たしうるとの認識を共有した。



The 41st JAIF Annual Conference

8

2. 各セッションの概要

◆セッション2「環境とエネルギー：大規模原子力開発国と台頭しつつある国の戦略とは」②

●ピョートル シェドロビツキー アトムエネルゴプロム 副社長

2008年2月、政府は、原子力、水力、石炭火力を促進する2020年までの総合電源開発計画を採択した。2010～20年の間に、100万kW級の原子力発電所26基を建設する計画。一方、2007年、原子力界の再編により軍民部門を分離し、民間の原子力企業としてアトムエネルゴプロムを設立した。これは世界の原子力カルネッサンスに応える動き。

●シュレヤンス ジェイン インド原子力発電公社 社長

インドのCO₂排出量は世界5位である。温暖化対策のため、今後25年間の総合エネルギー政策では、エネルギー効率化とあわせ、水力と原子力発電を従来より重視し開発することとしている。原子力は今後25年間に6,300万kWの設備容量増加を見込んでいる。国際協力を通しての大型軽水炉建設も戦略的に計画している。



2. 各セッションの概要

◆セッション2「環境とエネルギー：大規模原子力開発国と台頭しつつある国の戦略とは」③

●レオナン ギマランイス ブラジル原子力発電公社 社長付顧問

水力が91.9%を占めるブラジルの2030年までの国家エネルギー計画では、再生可能エネルギーと原子力発電の増大を見込み、建設中のアングラ3号機に加え、4～8基の原子力増設のシナリオを描いている。他方、核燃料サイクルのすべてにわたり技術開発を進めるブラジルは、大規模ウラン資源と燃料製造能力を兼ね備えた世界でも数少ない国のひとつ。

●アレックス ツェラ 南アフリカ原子力産業協会 理事

2025年までに合計8,000万kW以上の発電設備容量のエネルギーポートフォリオを目指す。原子力は最大で2,000万kW（シェアを現在の5%から30%に）に増強、石炭のシェアを86%から70%で引き下げる計画。気候変動への配慮こそ、このエネルギーポートフォリオにおける最優先事項。原子力開発ではウラン濃縮や燃料製造の能力も再建したい。



2. 各セッションの概要

◆セッション3

「世界の原子力ネッサンスは本物か」①

原子力は各国の戦略の中で重要な役割を果たせるとの共通認識のもと原子力ネッサンスを本物とし原子力産業の持続的発展をはかる観点から、課題と解決のための方向性を探った。

基調講演：ピーター ライオンズ 米国原子力規制委員会(NRC) 委員

- 原子力規制委員会と産業界はともに、将来の優秀な人材確保の課題に直面している。人材難は、原子力利用の基盤への脅威となる。
- 公衆に対して、科学的な事柄を簡潔明瞭かつ正確に伝えることこそ不可欠な努力。規制プロセスへの公衆の建設的な意見の有無は、いかにコミュニケーションをはかれるかにかかっている。
- 原子力発電所の計画、設計、建設、規制において、各国の知見と経験を活用することを目的とする「多国間審査プログラム」は、規制分野での国際協力プログラムとしての期待が大きい。



11



The 41st JAIF Annual Conference

2. 各セッションの概要

◆セッション3

「世界の原子力ネッサンスは本物か」②

パネリストの主な意見：

①人材確保について

- 若い人材を確保するには、原子力産業が魅力的に映らなければならない。原子力が地球環境保全、持続的発展に貢献できることをメッセージとして訴えることが必要。(リュック ウルセル アレバNP社 社長)
- 持続的発展に必要な技術継承をはかる観点からも若年の技術者育成が不可欠。大学と研究所の連携、異分野からの研究者採用などを推進することが重要。(早瀬 佑一 (独)日本原子力研究開発機構 副理事長)

②規制の整合性について

- 規制の不透明性は持続的な原子力産業の阻害要因になりうる。原子力産業界が市場を形成していくためにも国際的に整合性ある規制が必要。国際的に原子炉の「相互認証」という仕組みを提案したい。安全性の確保が経済的に報われることも重要。(イーゴリ レシュコフ ロシア原子力庁 長官補佐官)

12



The 41st JAIF Annual Conference

2. 各セッションの概要

◆セッション3

「世界の原子力ネッサンスは本物か」③

議長総括：

- 「原子力ネッサンスは本物である。また本物でなければならない。」
- ルネッサンスの流れのなかで、将来の持続的な原子力のためには、燃料供給、使用済み燃料、廃棄物処理処分、3つのS（安全、保障措置、核セキュリティ）、人材育成に対して、世界的規模で対応することが重要課題。



13



The 41st JAIF Annual Conference

3. 今大会の主な成果

- 世界的に温暖化対策に関する論議が高まりを見せ、原油価格高騰がエネルギー問題に大きな影響を与えるなか、「地球環境」と「エネルギー」という2つの要素を取り上げ、関係各国・機関の発表を通じて、人類の持続的発展に原子力は不可欠であるとの共通認識を形成することができた。
- 特に、G8サミットを控えた福田総理大臣が、現役総理として初めて大会に参加し、温暖化対策に切り札として有効な原子力発電を着実に推進することの重要性を訴えたことは国内外に対する大きなメッセージの発信となった。



The 41st JAIF Annual Conference

14

4. メディアによる報道

今大会には、メディア関係者40社・86名が参加。テレビニュースでの報道や各新聞に今大会を取り上げる記事が掲載されるなど、広く関心を集めた。

【テレビ】

4月15日（火）

- ・TBS昼のニュース：「福田首相、原子力発電の重要性強調」

【新聞】

4月15日（火）

- ・共同通信：「原発は温暖化対策の切り札 原産年次大会で首相」
- ・電気新聞：「原産大会きょう開幕：温暖化抑制へ“役割”強調
福田首相 原子力の重要性言及へ」 など

4月16日（水）

- ・産経新聞：「サミット目玉に首相が「原子力」」
- ・日経産業新聞：「「温暖化対策原発切り札」原産協年次大会で首相」
- ・フジサンケイビジネスアイ：「原子力利用促進を 原産協、温暖化対策に「重要な役割」」
- ・日刊工業新聞：「原発、温暖化対策の切り札 第41回原産年次大会 福田首相が出席」
- ・電気新聞：「原子力の利用拡大世界へ 原産年次大会が開幕福田首相「着実な推進が重要」
「原産年次大会セッション2 国際協力強調へ意欲 8カ国が最新動向を報告」

4月17日（木）

- ・電気新聞：「人材育成の課題指摘 NRCライオンズ氏講演 原産大会閉幕」
- ・UPI通信：「Japan to boost its nuclear capabilities」

4月29日（火）

- ・東京新聞：「首相、原発の重要性に言及 原産年次大会」



5. JAIF TVによる動画配信

◆第41回原産年次大会レポート



4月22日掲載 **NEW**

◆福田首相所感



4月22日掲載 **NEW**

＊ 原産協会ホームページよりご覧いただけます。
<http://www.jaif.or.jp/>



第 4 1 回 原 産 年 次 大 会 プ ロ グ ラ ム

基調テーマ：「人類の持続的発展と原子力の果たすべき役割」

4 月 1 5 日 (火)

開 会 9 : 3 0 ~ 1 0 : 0 0

原産協会会長所信表明

今井 敬 (社)日本原子力産業協会 会長

内閣総理大臣所感

福田 康夫 内閣総理大臣

セッション 1 1 0 : 0 0 ~ 1 2 : 0 0

「持続的発展への条件を問う」

このセッションは大会全体の基調となるセッションと位置づけられる。
人類の持続的発展のためには「2 大要素」を確保しなければならない。それらは、「地球環境」と「エネルギー」の2 つであることを、ここであらためて提起する。その上で、気候変動の緩和とエネルギー安全保障の向上に貢献する原子力利用の意義を確かめることとする。

議長：茅 陽一 (財)地球環境産業技術研究機構 副理事長、東京大学 名誉教授

議長問題提起：

「持続的発展のためのエネルギー脱炭素化」

茅 陽一 前 出

講演：

「世界のエネルギー需要の展望とエネルギー安全保障」

フランソワ グエン 国際エネルギー機関(I E A) 上級政策顧問

「持続可能な世界のための原子力発電の重要性」

ユーリー ソコロフ 国際原子力機関(I A E A) 事務局次長

議長総括

セッション 2

13:30 ~ 17:30

「環境とエネルギー 大規模原子力開発国と台頭しつつある国の戦略とは」

ここでは、セッション1での発表を受けて、持続的発展に不可欠な2大要素である「環境」と「エネルギー」の安全保障に対し、主要国はどう展望しているのか、どのような戦略を立てているのか、立てるべきなのかを開陳する。

既に大規模な原子力発電利用を進めている国と今後台頭する国々が、環境・エネルギー・資源確保において直面する課題と解決に向けた基本政策や戦略を発信する。

各国の発表を通して、原子力はそれぞれの戦略の中で重要な役割を果たしうるとの認識を共有する。

司会：水野 潤子 フリーランスナレーター

講演：

- 「フランスのエネルギー政策 原子力に期待される役割」
フィリップ プラデル フランス原子力庁(CEA) 原子力開発局長
- 「アトムエネルゴプロム その戦略的ビジョン」
ピョートル シェドロビツキー アトムエネルゴプロム 副社長
- 「米国における新規原子力発電所建設への確かな期待」
スコット ピーターソン 米国原子力エネルギー協会(NEI) 副理事長
- 「中国の原子力発電計画」
馮 毅(フェン イー) 中国原子力産業協会 事務局次長
- 「インドのエネルギー需要における原子力発電の特質」
シュレヤンス ジェイン インド原子力発電公社 社長
- 「ブラジルの電力システムと原子力発電の必要性」
レオナン ギマランイス ブラジル原子力発電公社 社長付顧問
- 「人類の持続可能な発展と南アフリカの原子力発電開発」
アレックス ツェラ 南アフリカ原子力産業協会 理事
- 「日本の原子力戦略」
平工 奉文 経済産業省 資源エネルギー庁 次長

レセプション

17:45 ~ 19:00 (会場：「プロビデンス」)

4月16日(水)

セッション3 9:30～12:30

「世界の原子力ネッサンスは本物か」

ここでは、セッション1、2での議論をふまえ、原子力は各国の戦略の中で重要な役割を果たせるとの共通認識をベースとした議論を展開する。

近年の世界的な原子力ネッサンスの流れを検証しつつ、原子力ネッサンスを本物とし原子力産業の持続的発展をはかる観点から、関係各国に共通する課題と解決のための方向性を探る。

議長：田中 知 東京大学 大学院 工学系研究科 システム量子工学専攻 教授

基調講演：

「国際的な規制協力、安全と安全保障の支え 将来の課題に応える」
ピーター ライオンズ 米国原子力規制委員会(NRC) 委員

パネル討論：

アキルベク カマルディノフ	駐日カザフスタン共和国 特命全権大使
ロバート バンナーメン	米国濃縮会社(USEC) 上級副社長
イーゴリ レシュコフ	ロシア原子力庁 長官補佐官
リュック ウルセル	アレバNP社 社長
金 鍾 信(キム ジョンシン)	韓国水力原子力 社長
早瀬 佑一	(独)日本原子力研究開発機構 副理事長

議長総括

午 餐 会 12:45～14:30 (会場:「プロビデンス」)

セッション内容とは趣を変え、環境と持続可能な社会をめぐる文化的内容の講演を聴く場とする。

講演(45分)

「江戸に学ぶ環境問題」
徳川 恒孝 徳川宗家第18代当主、(財)徳川記念財団 理事長

以 上